

#### 4. 何故「遊び」が必要なのか、必要な「遊び」とは何か

こどもたちは遊びを通して多くのことを育むと言われ、こどもたちが抱えている問題に対して「遊び」には大きな期待がかかっている。けれども、こどもたちの「遊びの出発点」は「おもしろそう、やってみたいな」であり、「あー楽しかった、またやりたいな、よーしもう一度」である。この気持ちが彼らの「遊び」に対する全てであり、何ものにも代え難い宝物、まさに生きるエネルギー、生きる力の源である。大人が期待するものは、こどもの将来にとって必要不可欠ではあるが、かれらにとってはたまたまの産物にしかすぎない。私は「こどもの遊びをこどもの世界に帰してあげたい！」と願っている。こどもたちの遊びがこどもたちの世界に帰ることで、少しずつかもしれないが、何か、いろいろなことが健康的に変わっていくのではないかと考えている。

### 地域福祉の推進に福祉現場としてどのように取り組むか

兵庫県社会福祉協議会総務企画部主任 村田 明子

福祉専門職は、常に人を支援することの難しさに日々直面している。地域における他機関・多職種との連携や支援困難事例だけでなく、利用者・家族からの苦情やトラブルにも対応しなければならない現状もある。また、社会的に援護を要する人たちに対する生活圏域を基盤とした援助のあり方や、終末期への支えのあり方など、今後、ますます重要になってきている。本人の真のニーズは何か、最後までその人らしく生きることを支えるということがどういうことなのか、地域福祉の推進に取り組む福祉現場の現状から問題点や課題について、次の4つの観点から報告したい。

1. 社会福祉・地域福祉の現場を大きく変えた介護保険制度
2. 福祉専門職の実態とは
3. 問われる権利擁護の視点と地域で暮らすということ
4. 求められる協働・多様なネットワークの構築の必要性

### さらに増加する余暇(自由時間)

武庫川女子大学文学部教授 吉田 圭一

レクリエーションの価値やレジャー(余暇)の機能への期待とともに、それらを可能にする「量」としての余暇(自由時間)に関心を持つことも重要であると思う。21世紀を迎えて、余暇の量は増加するのか、減少するのか。

#### 1 労働時間短縮と余暇

わが国、平成17年(2005)の年間総実労働時間は1,834時間であった。戦後最も多かった昭和

35年（1960）の2,432時間からみると1年間の総実労働時間が598時間減少したことになる。1日の労働時間を8時間として換算すると74日間分の減少である。このように先進諸国における20世紀後半の労働時間短縮に関する政策あるいは労使間の努力は、労働時間の短縮による自由時間の増加を目指したものであった。

## 2 21世紀の労働量

20世紀の労働は、ある意味で働きたいだけ働ける状態であった。大量消費を支える大量生産は年々仕事量を増加し、それをまかなう労働力を必要とした。

しかし、資源の枯渇や地球環境再生の必要から、21世紀の労働は20世紀とは異なった在り方を模索しなければならなくなったのである。大量消費への反省は地球資源を消耗する生産面での仕事量の減少をもたらすであろうし、さらに高度化すると予想される機械化は、人間の労力が担う部分をさらに奪うことになる。それは必要とされる労働量の減少を意味することになり、全体としても個人にとっても、量的に今までと同じだけ働くことができなくなる状態を意味しているのである。

## 3 労働力の増加

仕事量・労働量の減少が予想される21世紀は、その一方で労働力の量が確実に増加する世紀である。国連は50年後の地球人口を89億人と予測している。さらに、働ける年齢が肉体的にも高くなってきていることや、男女共生社会に関する意識の高まりによる女性の社会進出などから、働きたい人、働ける人がますます増加することは否定できない事実である。

## 4 労働の分配

今後予想される仕事量と労働力の量のアンバランスをいかにして解決するかは、人類に課された21世紀最大の課題であるといえる。

その観点のキーワードの一つが労働の分配（ワークシェアリング）である。一定の仕事量の中で、より多くの人々が働くことができる労働環境を作るためには、仕事を分け合うという単純な法則へ行き着くことしかないのである。当然、自由主義社会・自由経済社会において、それぞれの仕事の持つ意味あいや金銭的な価値まで分け合うことはできないにしても、少なくとも働ける時間を分け合うことは可能である。

## 5 余暇（自由時間）の増加

21世紀における余暇（自由時間）の増加は、働きたくても働けない時間が増えてくることによる増加である。望まなくても増加する余暇（自由時間）は、これまでの増えることを望んだ余暇（自由時間）とは少々別の意味を含んだ時間としての認識が必要になってくるのである。

もっと働きたいという意欲や余裕がある労力を、余暇（自由時間）のなかで受け止めなければならぬのである。余暇活動のひとつとして、働く意欲や労力を発揮できる場を作り出すことが求められることになる。